



本会元理事長 紀平英作先生を偲ぶ

本会元理事長の紀平英作先生は、二〇二五年二月四日、享年七八歳で逝去された。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は一九四六年一〇月二二日、東京都杉並区馬橋（現、同区梅里）に、紀平健次郎・ハル子ご夫妻の長男として生を享けられた。六五年三月に桐朋高等学校をご卒業、同年京都大学文学部に入学された。六七年に、創設もない史学科現代史学専攻に進まれ、今津晃教授、松尾尊光助教授の下で、研鑽を積まれた。六九年、同専攻を卒業された後、京都大学大学院文学研究科修士課程西洋史学（現代史学）専攻に入学、七二年に同博士課程に進学された。七二年八月から七六年三月まで京都大学文学部助手を務め

られた後、七六年四月に南山大学外国語学部英米科専任講師にご転出、八一年四月に同助教授に昇任された。この間、七六年度から八一年度には、京都大学教養部の非常勤講師として西洋史学Ⅱの授業を担当された。

一九八三年四月、京都大学文学部史学科（現代史学）助教授にご着任、九三年三月に京都大学博士（文学）の学位を授与され、同年四月に教授に昇任された。先生が教授を務められたのは、ちょうど大学改革の波が押し寄せ、京都大学文学部も変革を迫られていたときでもあった。先生は大学院重点化を要諦とする学部改組にも奔走され、二〇〇一年四月より京都大学評議員、同一年より〇四年三月まで文学研究科長・文学部長を務められるなど、学内行政でも手腕を発揮された。また、〇二年一〇月から〇七年三月には、文学研究科が文部科学省二一世紀COEプログラムに採択されたことを受けて「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」拠点代表を務められた。一〇年三月に京都大学を定年退職された後は、一七年三月まで帝京大学文学部史学科教授として教鞭をとられた。

多くの学会で活躍された先生は、関西アメリカ史研究会代表幹事、アメリカ学会会長を歴任され、当会では二〇〇四～〇六年に理事長を務められた。先生が理事長の時代、当会は、統一テーマの下に様々な分野の専門家が研究報告を行う例会を春に開催し、例会の内容を拡張する形で翌年度に『史林』特集号を刊行するようになった。当会は過去にも例会という名の会合を開催していたというから、先生は例会を「復活」させたというのが正確なのかもしれないが、今日のような形の例会と『史林』特集号の創始者

は、やはり先生であつたと言つてよいであらう。

先生の主たる研究分野はアメリカ史であつた。博士論文をもとにした『ニューデール政治秩序の形成過程の研究——二〇世紀アメリカ合衆国政治社会史研究序説』（京都大学学術出版会、一九九三年）は、フランクリン・ローズヴェルト政権の下で展開したニューデール改革が全国産業復興法を軸とする体制から社会保障法と全国労働関係法を軸とする体制へと移行していく過程を、改革を主導した「リベラル」勢力の動向とその思想的展開に着目しつつ、当該期の社会や経済の動向と国家の変容を統合的に捉える視点から能う限り仔細に描き出した、当該研究分野の金字塔的な作品である。

経済・社会・思想の動向、政治勢力の離合集散、そして国家の変容を、幅広くかつ連続したものとして捉えようとする先生のアプローチは、『世界歴史大系 アメリカ史』2（有賀貞ほか編、山川出版社、一九九四年）、『アメリカの歴史——「新大陸」の近代と激動の現代』（編著、放送大学教育振興会、一九九六年）、『アメリカ合衆国の膨張』（亀井俊介と共著、中央公論社、一九九八年・二〇〇八年に中公文庫として再刊）、『アメリカ史』（編著、山川出版社、一九九九年・二〇一九年に増補の上、山川セレクトション『アメリカ史』上下巻として再刊）などの概説にも反映されている。つなぎあわせると独立革命から二一世紀までをほぼ網羅することになる先生の概説は、アメリカ史を学ぶ者に多くの示唆を与え続けている。

先生はまた、世界史としての現代史を考察することを目指しておられた。『バクス・アメリカーナへの道——胎動する戦後世界秩

序』（山川出版社、一九九六年）、『歴史としての核時代』（山川出版社、一九九八年）は、アメリカ史を分析の起点として、アメリカが巨大な影響を及ぼした戦後世界のありようを考察するものであつた。一方、『歴史としての「アメリカの世紀」——自由・権力・統合』（岩波書店、二〇一〇年）、『ニュースクール・二〇世紀アメリカのしなやかな反骨者たち』（岩波書店、二〇一七年）は、思想的な観点を重要な柱として、二〇世紀のアメリカ史の展開を世界史の動向の中に捉え直す試みであつた。

先生は、二〇二二年春に病を得られた。『奴隸制廃止のアメリカ史』（岩波書店、二〇二二年）、『始動する「アメリカの世紀」——両大戦間期のアメリカと世界』（山川出版社、二〇二四年）、『リンカン——「合衆国市民」の創造者』（岩波新書、二〇二五年）は、闘病を続けられる中で生み出された作品である。私たちが先生の病を知つたのは、二〇二四年一月に先生が関西アメリカ史研究会に「関西アメ研の友人の方々に」と題された一文を寄せられ、その中でご自身の病状を明かされたことであつた。これは同会会員に向けられた告別の文章であつたが、その最終段落は、幅広く後進の歴史研究者への叱咤でもあつたように思われる。泉下の先生が許されると信じて、当該段落を引用する。

いま世界は、自然環境をも含めて近代に入つてほとんど経験したことのない混乱と変動の過程にあります。戦争、自衛の名を借りたあまりの理不尽な虐殺、民主主義の形骸化、権力の横暴、どれをとつても耐え難いほどです。このようなときこそ、歴史家は活眼を開いて変動過程を見届けることを任務とするのだと

思います。僕も命ある限りそれ続けようと思っています。皆さんのお仕事が実り多いものであることを心から念じています。

厳しい闘病生活の中で、三冊もの著作を書き上げるばかりでなく、お元気であった頃と変わることなく「活眼を開いて」同時代と対峙しつづけようとされた姿に圧倒される。残念ながら、世界は先生が「耐え難い」と表現された方向にいつそう突き進んでいるように見える。先生が心安らかに眠られることを祈るばかりである。

（小野沢 透）